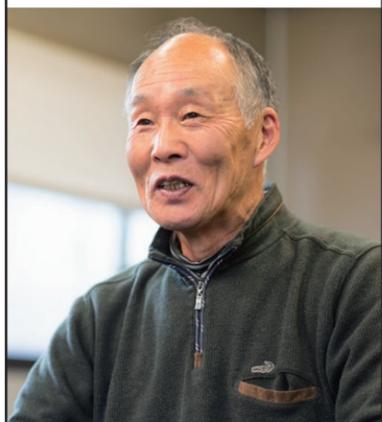


長崎市民の声が
川内村の
辛苦を解いた

”長崎くんち“の 太鼓山に使われた 川内村産ヒノキ



太鼓山のヒノキを切り出した志賀泰三社長

2018年10月7日から開催された”長崎くんち“。諏訪神社の祭礼は、毎年賑わいを見せています。そんな群衆の中に、感涙にくれる福島

県の人達がいたことはあまり知られていないかもしれません。

”長崎くんち“では、毎年5〜7ヶ町の踊町から演し物が披露されます。全国的に有名なのは龍踊りですが、長崎市民に絶大な人気を誇るのが7年に1度しか見ることができない杵島町の太鼓山、通称「コッコデシヨ」です。

五色の座布団を重ねて4メートルの高さにもなり、重さは約1トン。36人の担ぎ手が、「コッコデシヨ」のかけ声に合わせて、太鼓山を高く空に浮かせ、それを再び片手で受け止めます。その迫力もあり、くんちの演し物の中でも特に高い人気を誇っています。

「コッコデシヨ」が出てきたときの声援はただごとではありませんでした。

原爆からの復興を経験した長崎の人々にとって、原子力災害はいまでも身近な問題です。長崎大学が福島をずっと支援するのも、原子力災害に苦しんだ過去を共有するからという面もあるでしょう。そんな”助けないではいられない思い“は、長崎大学にとどまらず、市民にも広がっていたのです。

た。そのとき『川内村の遠藤（雄幸）村長が来ました』というアナウンスが流れて、ふと目をやると、村長が涙ながら見ていました。私も本当に涙が出ました」と、川内村で林業を営む志賀林業の志賀泰三社長は振り返ります。

「コッコデシヨ」は7年に1度奉納されていますが、2018年に新たに制作された太鼓山は、福島県川内村で志賀林業が切り出したヒノキで作られていたのです。志賀社長は「そのようなところに使っていた方がいいのかという恐れ多い気持ちと、使っていただけた喜び、これまでの苦しみとがなげまぜになった感情がわき上がってきていました」と振り返ります。

川内村は大正から昭和にかけて、木の炭の生産で日本一だった歴史があります。木炭の利用が減っても、林業は主要産業の一つであり続けたのです。

暗転したのは、震災の後、福島第一原子力発電所の事故が起きた後の事でした。事故後の2012年には、農林水産省の林野庁から、木材製品の安全性には問題がないと報告されているのですが、風評被害までは拭えなかったのです。志賀社長は、「福島県産の木材が」全く「受け入れられなくなりました。調べてもいないのに、流通先で断られるよう

「安全なのに…」
流通先で断れたことも

暗転したのは、震災の後、福島第一原子力発電所の事故が起きた後の事でした。事故後の2012年には、農林水産省の林野庁から、木材製品の安全性には問題がないと報告されているのですが、風評被害までは拭えなかったのです。

志賀社長は、「福島県産の木材が」全く「受け入れられなくなりました。調べてもいないのに、流通先で断られるよう

本当に使っていただけ
のかという思い

一方で、2011年の東日本大震災からずっと心を痛めていた人物が、長

崎市杵島町にいました。太鼓山応援団代表の井村啓造さんです。

井村さんは2013年、川内村と連携している長崎大学のことを知り、太鼓山の木材に川内村産材の使用を”と申し入れたのです。

長崎大学の高村教授は、志賀林業に木材使用の話を持ちかけます。「たださえ、使いたくないと言われていたつらい時期に、使いたいという話を聞いたのです。『本当に使っていただけなのか？』もしよいのであれば、無償でもお届けしたい」という思いを持ったのを思い出します」と志賀社長は振り返ります。

川内村の私有林からヒノキを切り出し、長崎大学の協力も受けて放射線量が測定され、結果として、問題ないと

太鼓判が押されました。木材はその後乾燥の期間を経て使われることになりました。「立派な木で、自分で見てもいい木だと思いました。乾燥の時期も踏まえると、2025年くらいに使えるのかなと言っ見通しでした」と志賀社長は言います。

しかし、2018年、予定よりも前倒しで使えるとの判断が下りました。ついに川内村のヒノキが太鼓山に使われることになったのです。

そうして、2018年10月の祭り本番を迎えました。「コッコデシヨ」の掛け声の中、辛苦を味わってきた志賀社長と遠藤村長たちの想いを乗せて、太鼓山は長崎の空に高く何度も舞い上がりました。

長崎にとって福島は「他人事ではない」

長崎市 田上富久 市長

福島に状況に寄り添うことが大切だと思います



福島の原発事故は、長崎市民にとって他人事ではありません。福島の方々への思いは、強いものがあると思います。それは、放射線による被害という部分で長崎の原爆被害と重なるからです。

福島の方々には、風評被害や差別について理解してもらえない苦しさ、目に見えないものへの恐怖感や心配というのがあるのではないのでしょうか。放っておくと人間は偏見を持つことがあります。偏見による被害に子どもがさらされます。大人が止めないといけません。

長崎市民は、そうした体験を原爆被爆者から聞いているから理解できます。

長崎市民の感覚としては、そうした福島に状況に長崎だからこそ寄り添える、寄り添いたいという気持ちを持っていると思います。

原発事故の後、福島に向かおうとする山下俊一先生は「風評被害は必ず起きる」と話されました。胸が詰まるような思いを覚えています。それを覚悟して向かわれた先生の勇気に感動しました。想定されない事故が起きて、何か力になりたいという長崎市民の思いを真っ先に形にしてくれたのが長崎大学でした。長崎にとっての誇りです。

毎年、8月9日の平和祈念式典で行う平和宣言では、福島のこと言及しています。平和宣言は、起草委員会の15人くらいの方と時間をかけて練っています。そのうえで、長崎市民の総意として、福島のことを継続して伝えているのです。それは、忘れられるのが一番怖いと思っています。世界中の人が共有すべき問題だと思っています。